村総合文化祭に展示される陶芸作品。
質の高い陶芸作品が、毎年会場に並びます。

始まりは小さな活動であったとしても熱心な活動はやがて地域の『常識』となり、伝統や文化に姿を変え継承されていく。これは一つの例ですが、住民の皆さんが主体的に行う地域の活動には、大きな可能性が秘められています。

日本の伝統工芸の一つである『陶芸』。陶芸文化を愛好し、陶芸活動を楽しむ占冠村陶芸サークル『陶占窯（とうせんがま）』は、1994（平成4）年からその活動を開始。当時公民館が開催した陶芸教室の参加者を中心に、『陶芸を続けたい』という思いを持った人が集まって設立に至りました。

現在は、村総合文化祭への作品出展や陶芸教室の開催、学校授業での指導など幅広い活動を展開。地域を盛り上げる団体の一つとなりました。

地域内でつながりの希薄化が問題とされる今日、住民同士がつながり楽しむ場は、貴重な場だと言えるでしょう。住民の皆さんが楽しむ地域の活動は、間違いなく地域の宝物の一つ。村内では、素晴らしい地域活動がたくさん行われています。今月は陶芸サークル陶占窯の活動に迫ります。

▲▶学校で取り入れられる陶芸教室。
写真は中央小学校の授業の様子です。
「優しく教えてくれるので安心して作ることができる」と子どもたちから高い満足感を得ています。

想像力・感性を育み、表現する楽しさを知る

陶芸作品は、①作品イメージの決定、②土練り、③成形、④削り、⑤乾燥、⑥素焼き、⑦撥水剤塗り、⑧色付け、⑨本焼きといった工程を経て完成します。

自由な発想で作品を作ることができるのは、陶芸の大きな魅力の一つです。作品の完成イメージを決定する工程では、個人の自由な発想が楽しさを生み、想像力を高めてくれることでしょう。作品の成形作業では、造形的な美しさを知ることができるだけではなく、アイディアを形にする思考力、表現する手法などの感性を磨くきっかけとなります。また、陶芸作品の完成に至るまでには、粘土を練る、伸ばす、描くといった指先を使用する作業がたくさんあります。これらの作業は脳に良い刺激となり、脳の活性化につながります。

陶芸活動を通して得られるものは、想像力や感性だけではありません。作品を完成させる喜びや楽しさ、達成感を味わうことができるのも陶芸活動の大きな魅力の一つと言えます。

作品を作り続けると技術の幅も広がり、挑戦したいもの・作りたいものが増えていきます。前向きな挑戦心は、生きがいとなって私達の人生をきっと豊かにしてくれるはず。『達成』と『挑戦』。この2つは私達が人生を生き抜く上でも欠かせないものです。

陶芸に触れる機会を

占冠村内の各学校では、授業に陶芸体験を取り入れ、子どもたちに芸術文化活動に触れる機会を提供しています。

『活動を続けることができるのは多くの方々からの支えがあってこそ。陶芸活動を通して地域貢献もしたいと考えています。毎年子どもたちに指導の機会を設けてくださるのは嬉しいことです。』と、陶占窯代表の五十嵐正雄さんは語ります。

陶占窯は、学校での指導だけではなく、公民館事業自主創造プログラムを活用した陶芸教室も開催。村民が陶芸に触れる機会を創出するなど、積極的な活動を続けています。

陶占窯代表 五十嵐正雄さん

児童生徒に大好評の陶芸体験の授業時間。学校と地域をつなぐ、貴重な時間。地域に欠かせない教育活動に。

焼き物の技法に触れる、焼き物の魅力を知る

陶芸作品づくりの体験を通して焼き物の技法を知ること、焼き物の魅力に触れ、身近な美術作品への造詣を深めることを目的として、陶芸体験教室が村内学校の授業に取り入れられました。

学校の授業で陶芸の技法などを指導するのは陶芸サークル『陶占窯』の皆さん。地域住民が講師となり、児童生徒に対して陶芸の技法などを丁寧に教えます。

コップやお皿などの食器類やキャラクターの置物など、子どもたちが作りたいものは多岐にわたります。『可能な限り、希望するものを作らせてあげたい。』と、陶占窯の皆さんは陶芸の技法の指導とともに、作品完成に至る手助けも行います。授業を受けた子どもたちは、完成した作品に満足げ。『子どもたちに陶芸を楽しんでもらいたい。』という思いやりの心と積極的なコミュニケーションが、子どもたちに大きな達成感を与えます。

学校授業で行う陶芸教室は、陶芸の技法等を教えるだけの時間ではなく、学校と地域住民の交流の輪を広げる貴重な時間でもあります。

陶芸活動の拠点である民芸加工授産所を訪問すると、陶芸サークル『陶占窯』の代表者である五十嵐正雄さんと奥さんの正子さんが迎えてくれました。

――陶芸を初めて体験する子どもたちの様子を教えてください。

正雄さん：陶芸の授業では、失敗を恐れて挑戦できない子、作りたいものを上手に表現できず、失敗して泣き出してしまう子などがいます。

正子さん：陶芸作品には正解がありません。どんな形になってもいいんです。世界に一つだけしかないものをつくるんだから、他人と比べる必要なんてありません。歪な形になったとしてもそれが味になる。陶芸の魅力の一つです。

正雄さん：失敗を恐れる子どもたちには、『正解なんてないのだから、思い切りやってみなさい。もし穴があいてしまったり、形が崩れても大丈夫だ。おじさんが、ちゃんと直してあげるから。』と伝えます。その一言があると、安心して授業に臨めるようです。

――陶芸教室に協力して何か変化はありましたか。

正雄さん：地域の子どもたちとのつながりができたことですね。陶芸の授業を担当した日、授業を受けた下校途中の生徒が家の近くを通りました。『楽しかったか！』と声をかけると『すごく楽しかった！』と笑顔で答えてくれました。

正子さん：子どもたちは、体験した授業の内容を家庭で話しているそうなんですよ。保護者の方とお会いしたとき、『嬉しそうに話していましたよ。』と、その様子を聞くことができました。大変嬉しいことです。

正雄さん：兄や姉がいる子は、家で陶芸についてアドバイスを受けているようです。先に体験した兄（姉）の話を聞いた子は、より興味を持って授業を受けてくれます。初めて陶芸を体験するはずの子がこだわりを持って授業に臨む姿は大変微笑ましい。私たちの取組が家庭の話題にのぼるのは大変光栄なことです。

――陶芸教室の準備には、大変な面もあると思います。

正雄さん：陶芸作品は、粘土の中に空気が混じっていると、焼き上げたときに空気が膨張して割れてしまいます。粘土の中に残っている空気を抜くためには、菊練（きくね）りという工程が必要です。菊練りは、陶芸に慣れていない素人の方や力が弱い子どもには難しい作業です。そこで、陶占窯の会員が授業が始まる前までに、菊練りなどの下準備をしておきます。不足していれば作品に着色するための釉薬（ゆうやく）を作り足すこともあります。

正子さん：児童生徒らが満足してもらうため、下準備は念入りに行います。

正雄さん：『お世話になっている関係者の皆さんのためにも、地域に何かをしてあげたい』、その思いが私たちの活動の柱になっています。

▲粘土から空気を押し出す。空気が抜けきっていないと壊れる原因にも。

▲素焼きと本焼きを行う専用の窯の内部。本焼きは、作品に掛けた釉薬（ゆうやく）を高温で溶かすことで、作品の装飾や強度を持たせるために行う工程です。1,230℃という高温で、約14時間かけて作品を焼き上げます。陶芸作品が出来上がるまでには約１ヶ月の時間を要します。

美しい仕上げに欠かせない『釉薬（ゆうやく）』

完成した陶芸作品に、着色やコーティングなど装飾の役割を果たす『釉薬』。
陶芸作品の素地に水や汚れが染み込むことを防ぐと同時に、さまざまな色や質感などを表現します。陶芸作品の印象を大きく左右する『釉薬』は、欠かすことのできない要素の一つです。
この『釉薬』は、購入すると実は高価なもの。お金をかけずに陶芸を楽しみたい陶占窯の皆さんは、なんとこの『釉薬』を手作りしています。様々な素材を混ぜ合わせる釉薬の配合は、手間と時間がかかるとても大変な作業です。陶芸を楽しむためにも、下準備は欠かせません。陶占窯では、約10種類の釉薬を準備しています。

陶芸教室講師を努める
藤本　広栄さん

▶姉が習っていた陶芸に興味を持ち、陶芸を開始。現在は活動を休止中ですが授業の指導には参加しているとのこと。授業では複数人の陶占窯の会員が指導にあたります。右は広栄さん作。

藤本広栄さんは、村内学校で実施する陶芸教室の指導を行う講師の一人です。「子どもたちの成長のために、作業は見守ってあげるべきなのでしょうけど、難しい工程では手伝うこともあります。どこまでなら手伝っていいのか。どうやって作業を進めてもらうか。教える側も常に勉強が必要ですよね。」と指導の難しさを話してくれました。

授業では、穴が空いてしまったり、思い描いた形にならなかったりする子もいるそうです。「穴が空いてもほとんどの場合では修復可能ですが、初めての体験なので失敗は仕方のないことですよね。『失敗を、次はどう生かすか』。この授業では、想像力や表現力を育むことができると思いますが、『失敗する体験』から学べるものもあると思います。失敗から学び、挑戦するようになってくれると嬉しいです。」と、広栄さんは子ども達の失敗をむしろ肯定的に捉えています。

陶占窯の活動を支えた
黒瀬　房子さん

▶取材に伺うと、黒瀬さんが制作したお気に入りの作品を紹介してくれました。右の写真は黒瀬さんが初めて制作したフクロウ。目元を作るのが難しく、旦那さんの顔を見て参考にしたとのことです。『じいさんの顔』と、暖かな笑みを浮かべてフクロウを紹介してくれました。

65歳のとき、陶芸に興味を抱き活動を開始した黒瀬房子さん。約20年にわたり陶芸活動を続けました。「完成した作品が良い形をしていたら本当に嬉しい。もっと若いときからやっていたら良かった。」と陶芸に対する思いを話し始めました。房子さんは、粘土の購入や、若い会員への指導、窯への火入れ、作業場の掃除など、陶芸活動の土台となる下準備や管理をとおして陶占窯の活動を支えてきました。房子さんは、村民芸加工授産所に毎日のように通っていたため、会員の一部には『雇われ管理人』と誤解されることもあったそうです。陶占窯の会長の正雄さんは、「黒瀬さんがいてくれたおかげで活動を続けることができた。」と感謝を語ります。

「普通の掃き掃除では粘土片などの粉塵が宙に舞い上がってしまいますので、濡れた新聞紙を床に敷き詰めて箒で掃くなど、掃除の仕方にも工夫が必要でした。また、陶器の焼成作業を行う日は早朝5時から作業を開始することもありました。当時の窯は、現在のような立派な窯ではなく、強い風が吹くと火が消えてしまうこともありました。消火しないように、燃料を調整するなどしながら一日中見守っていたことが何度もあります。陶芸作品は一人では完成させることができません。作るための環境を整えたり、下準備が欠かせない。大変だったことはたくさんありましたが、協力してくれるたくさんの人や会長の五十嵐さんがいたから頑張ることができました。」と、陶芸活動に費やした日々を懐かしそうに語ってくれました。

▲陶占窯副会長の小林さん（左）と、陶芸を始めて一年目の藤本さん（右）。初心者にも丁寧に教えます。

陶占窯は、中央地区の占冠村民芸加工授産所（毎週月・水曜日）とトマム地区の地域カフェ『ミナ・トマム』（毎週水曜日）の2箇所で活動中。ミナ・トマムで行っている陶芸活動の取材に伺うと、会員が和気あいあいと作品づくりに取り組んでいました。

ミナ・トマムで陶芸を始めて1年になる中学1年生の藤本さん。周りの会員に教えてもらいながら陶芸を楽しんでいます。取材時は、陶占窯副会長の小林睦子さんが、粘土の練り方などを藤本さんに教えていました。地域活動に参加をしていなければ、つながらなかったかもしれない交流の輪。地域活動をとおして、交流の輪は大きく広がっていきます。

少人数から始まった陶占窯の小さな活動。現在では、地域住民を結びつける大切な役割を果たしています。今回ご紹介した陶占窯の活動は、村で行われている素晴らしい地域活動の一つ。日常的に行われている行政区の取組や文化・スポーツなどの地域活動は、地域住民のつながりをつくり、そのつながりは地域の活力の源となります。住民同士がつながり楽しむ地域活動の場は、間違いなく地域の宝物の一つです。地域活動に目を向け、知り、参加する。地域活動への参加が、魅力ある地域づくりへの第一歩です。

きっかけは幼少期の粘土遊び
ずっと陶芸が大好き
トマムの陶芸古参江頭一馬さん

いいね！

陶芸を始めて10年以上になる古参の江頭一馬さんは、ミナ・トマムで活動中。子どもの頃から粘土細工を作るのが好きでした。

「川縁（かわべり）にも粘土はそこら中に落ちているんですよ。子どもの頃は、川縁の粘土で形を作って遊ぶのが好きでした。ある時、中央地区で陶芸活動をやっているのを知り、陶芸を始めました。以来、陶芸を楽しんでいます。」と江頭さん。今回は立派な徳利とおちょこを制作しました。その出来栄えは陶占窯会長の五十嵐さんも絶賛するほど。この徳利で家族でお酒を楽しみたいと話してくれました。

——想像（おもい）を指先にのせて。世界に一つの、あなたにしか作れない『器（かたち）』を作りませんか。

——1992年、公民館が開催した陶芸教室。その教室がきっかけとなり、陶芸に興味を持つ人々が集い陶芸活動が開始しました。現在では、陶芸文化を愛好し、陶芸活動を楽しむ陶芸サークル『陶占窯』として活動。21名が在籍しています。

会員が制作した作品の文化祭への出展、公民館自主創造プログラムを活用した陶芸教室の開催、学校授業での陶芸指導など幅広く活動を続けています。

活動日時

中央地区　毎週月・水曜日（5月～11月）
トマム地区　毎週水曜日（年中活動）

活動場所

中央地区　占冠民芸加工授産所
トマム地区　ミナ・トマム

会　　費

大人　月500円　子ども　月300円